大阪府立中之島図書館

昨年 11 月 7 日にレポートした時は耐震工事中だったが、4 月 1 日よりリニューアルオープンした。まだ開館前であったので、ゆっくり眺めることができた。写真は威厳のある正面あたりを撮ったものだ。6 月から第 2 期リニューアル工事に突入し、10 月末まで臨時休館する。

『月刊島民 中之島』82 号は「中之島図書館はすごかった」という特集を組んでいる。歴史 1 として、「知識欲高まる明治時代。市民の声を追い風に、大阪的図書館誕生す」とある。住友家第 15 代当主である住友吉左衛門友純。大阪府の計画を知った彼は、建物の建設費および図書購入費用の寄付を申し出た。欧米遊学中にアメリカの富豪がシカゴの美術館に私財を投じたことに感銘を受け、「自分も財閥の使命として、公共の施設を建設したい」という夢があった。吉左衛門は「せっかくつくるなら技術と資材は惜しむべきではない」と府の建設予算案を拡大させ、自ら立ち上げを命じた住友家臨時建設部に設計を託した。

話は歴史Ⅱに続く。「戦火を免れた奇跡の図書館。戦後、ますます市民と密着。そして『専門図書館』へ」戦火をくぐり抜け、さらに市民に開かれた知的公共施設を目指した大阪府立図書館は、豊富な大阪資料や古典籍が活かされた主題別閲覧室と、分類法を改めた新目録を導入。1974 年に大阪府立中之島図書館と名を変え、本館と左右両翼が国の重要文化に指定された。

歴史Ⅲは「図書館＝読書施設を超えたモデルとなるべく、平成の第 2 期リニューアルへ」リニューアルの背景には、大阪府議会でも問われた中之島図書館そのものの存在意義や、閉鎖後の美術館への転用など、外部有識者の意見があった。確かに図書館という枠だけで考えたとき、その中身は最先端でもなく、実用性に欠ける面もあるかもしれない。しかし、その歩みを振り返れば、大阪中之島の文化や歴史を発信する拠点として、これほどふさわしい場所はないと感じる。今後は同じ中之島のシンボル同士として、中央公会堂と連携した事業も展開していくという。図書館の可能性を広げつつある中之島図書館の新しい門出を、楽しみに待ちたい。

大阪の歴史を振り返り、「大阪都構想」を考えるうえでも学ぶことは多い。

（2015 年 6 月 3 日）